日本歷史

张志海 王岩 ◎编著

蘭州大學出版社

*本书获兰州大学教材建设基金资助

日本歷史

张志海　王岩 ◎ 编著

兰州大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本历史 :日文/ 张志海,王岩编著. —兰州:兰州大学出版社,2012.4

ISBN 978-7-311-03884-7

Ⅰ.①日… Ⅱ.①张… ②王… Ⅲ.①日本—历史—教材—日语 Ⅳ.①K313

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 067184 号

责任编辑 施援平 刘振宇
封面设计 管军伟

书　　名 日本历史
作　　者 张志海 王岩 编著
出版发行 兰州大学出版社 (地址:兰州市天水南路 222 号 730000)
电　　话 0931 -8912613(总编办公室) 0931 -8617156(营销中心)
0931 -8914298(读者服务部)
网　　址 http://www.onbook.com.cn
电子信箱 press@lzu.edu.cn
印　　刷 兰州奥林印刷有限责任公司
开　　本 710mm×1020mm 1/16
印　　张 22.75
字　　数 364 千
版　　次 2012 年 4 月第 1 版
印　　次 2012 年 4 月第 1 次印刷
书　　号 ISBN 978-7-311-03884-7
定　　价 48.00 元

(图书若有破损、缺页、掉页可随时与本社联系)

前　言

今天，中日两国有史以来首次同时呈现大国崛起之势，这是对两国共同的考验。也许历史并不能告诉未来，但从历史中汲取教训，却是每个民族应有的智慧。

尽管日本是我们的近邻，但多数中国人未必真正了解日本。另外，由于近代以前日本文化是在大量吸收中国文化的基础上发展起来的，中日文化无论是在语言文字上，还是在生活方式上，都带有浓厚的类似性，这便减少了中国人主动了解日本的意欲。

实际上，日本具有独特的历史文化。日本历史的独特性在很大程度上受其岛国地理位置的影响。历史上的日本有时可以说离大陆非常近，以致于他们足以从大陆的高度文明中获取足够的营养；但有时又可以说距离非常远，远到他们可以随意选择和拒绝。事实上，日本人对从大陆引进的文明异常敏感和警惕，尽管日本人被普遍认为是一个善于借用的民族，但由于其所处的独特的地理位置，较之其他任何民族，他们的独立性诉求更为强烈，发展出的文化也更大部分地属于他们自己，这是我们学习当中尤其要留意的地方。比如，日本人借用了汉字，但发明了他们自己的书写体系；平和的佛教到了日本，却生发出了许多杀伐性；中国讲仁爱讲中庸正道的孔子学说，在日本则形成了古学派的山鹿素行的神权说；以唐长安为模型，日本人建立了帝都平城京和平安京，但其庙宇、楼阁、神龛和庭院都具有日本的特色，等等这一切都证明：文化会随着境遇的变化而发生变化。

从历史上看，自公元3世纪末叶始，以中国文化为中心的大陆文化逾越了地理屏障传入日本，带去了汉字，也带去了铁器、制陶、纺织、金属、土木等

工艺和技术，促进了日本社会生产力的发展。日本因全面引进了中国的先进制度和文化，得以迅速发展成为东亚的一个强国。但是，由于社会发展的内部原因，从平安时代起，日本脱离汉文化圈的倾向日益明显，虽然之后他们与中国在文化上的联系仍在继续，但实际上却走出了一条不同于中国的发展道路。

首先是经济基础发生了变化。在封建社会中，经济基础的本源是土地制度。在土地所有制方面，中国封建社会的经济主体是小农经济，故基本上是以封建地主土地所有制贯彻始终。比较而言，日本的土地所有制形式经历了较为复杂的变化，自大化改新至明治维新，曾出现过土地国有制、庄园领主制、分封制3种主要形式。土地国有制的瓦解，庄园领主制以及分封制的形成，使中央权力趋于分散，皇权趋于衰落，最终导致了分裂的局面。

其次，经济基础的变化必然导致政治结构的变化。庄园土地私有制的产生与发展，逐步瓦解了中央集权统治的经济基础，导致权力下移，出现公武二元政治格局。9世纪后期出现藤原氏外戚的摄关专权，11世纪以上皇或法皇为中心的“院政”时代，12世纪中期武士阶级开始登上政治舞台，之后衍生出以幕府成立为标志的武家统治格局。至明治时代，公武二元政治始终作为日本独有的政治生态，绵延600多年。

历史左右现实、现实源于历史。通过历史可以洞悉现实，研究历史本身也是为现实服务的。基于这一认识，我们组织编写了这部教材。本教材自日本的诞生开篇，至平成时代，共分为14章。为了配合日语专业高年级课程需要，以及近年来不断增长的日语研究生考试需求，本教材全部采用日语表述。课程按每周2课时开设，可满足1学期使用。

本教材有以下几个显著特点：

第一，为了保证历史知识及观点的准确性和正确性，在参考材料的选用和观点的借鉴上做到了精心筛选和谨慎选用，基本反映了当今中日两国学界的最新学术动向和研究成果。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第二，为了便于教师讲授和学生学习，本教材中出现的难读的人名、地名、事件等均标注了读音；另有附录编入中日两国历史年表、日本国名·县名对照图等，方便学生学习。

第三，本教材汲取现有教材不足，书中加注、引用多达420多处，其中加注350处、引用70处，目的是便于学生系统理解和学习知识，清除知识死角和盲点。

第四，本教材在写作方式及内容编排上力图改变我们以往历史教材存在的某些不足：在写作方式上，既要求有学术基础——以已有的学术研究成果为依据，同时又要求文字浅显易懂，可读性强。

总之，本教材力图以新颖、全面、学术性等特色，将日本历史知识传播给读者。

最后，在本书的出版、编写过程中，得到了兰州大学教材建设基金项目全额资助，得到了出版社施援平博士、东北大学大学院文学研究科中岛英介博士的指导和鼓励，在此表示最诚挚的谢意。由于本人水平有限，书中一定还有许多不足，不当之处，作者自是完全负责，如能得到同行、同好、学友的指正，作者在此先行感谢。

张志海

2011年仲春于兰州大学

目　次

第一章　日本の誕生 / 1

第一節　日本列島の成立と日本人の登場 / 1

第二節　列島旧石器人の風貌と石の文化 / 5

第三節　縄文土器 / 9

第四節　縄文人の生活と社会 / 11

第五節　弥生文化と社会 / 14

第六節　日本農耕文化の成立 / 17

第七節　国の興亡と邪馬台国連合 / 19

練　習 / 22

第二章　日本古代王権の成立と文化の発展 / 25

第一節　大和王権の成立とその支配体制 / 25

第二節　渡来人の活躍 / 28

第三節　古墳文化の発生と発展 / 30

第四節　古墳人の土着神信仰と風習 / 33

第五節　対隋交渉と遣隋使の派遣 / 35

第六節　大和政権の動揺と聖徳太子の摂政 / 36

第七節　大化の改新と律令国家の形成 / 38

第八節　飛鳥・白鳳文化 / 41

練　習 / 43

第三章　奈良時代 / 45

第一節　律令国家の成立 / 45

第二節　平城京 / 46

第三節　王朝の土地改革と荘園の出現 / 47
第四節　王朝政界の動揺 / 49
第五節　華やかな天平文化 / 50
練　習 / 52

第四章　平安時代 / 54
第一節　律令政治の再建 / 54
第二節　弘仁・貞観文化 / 55
第三節　王政意識と摂関政治 / 57
第四節　荘園制の変容と武士団の出現/ 59
第五節　国風文化の発達 / 62
第六節　院政と平氏政権 / 64
練　習 / 67

第五章　武家社会の形成とその文化 / 70
第一節　武家政権の成立 / 70
第二節　執権政治と承久の乱 / 74
第三節　鎌倉幕府の社会と経済 / 77
第四節　蒙古襲来と得宗専制 / 80
第五節　惣領制の解体と幕府の動揺 / 83
第六節　鎌倉文化 / 85
練　習 / 89

第六章　南北朝時代 / 93
第一節　建武新政 / 93
第二節　南北朝内乱 / 95
第三節　南北朝時代の文化 / 97
練　習 / 98

第七章　室町時代 / 100
第一節　室町幕府の成立とその支配構造 / 100

第二節　対明貿易と倭寇 / 102
第三節　惣の形成と土一揆 / 105
第四節　産業の発達 / 107
第五節　室町幕府の衰退 / 109
第六節　戦国大名の登場 / 110
第七節　戦国争乱 / 112
第八節　室町文化 / 114
練　習 / 117

第八章　安土桃山時代 / 120
第一節　織田信長による政権の確立 / 120
第二節　豊臣秀吉による天下統一 / 122
第三節　南蛮貿易 / 123
第四節　織豊政権の政策制度 / 125
第五節　桃山文化 / 128
練　習 / 130

第九章　江戸時代 / 133
第一節　徳川幕藩体制の確立 / 133
第二節　身分制度の形成 / 137
第三節　農民統制の強化 / 139
第四節　江戸初期の外交政策 / 142
第五節　寛永期文化 / 147
第六節　文治政治への転換 / 149
第七節　産業の発達と経済の成長 / 152
第八節　元禄文化 / 156
第九節　幕藩基盤の動揺と享保・寛政改革 / 159
第十節　幕藩体制の衰退と天保改革 / 167
第十一節　藩政改革と西南雄藩の動向 / 172

第十二節　化政文化 / 176
練　習 / 181

第十章　明治時代 / 187
第一節　開港と開国 / 187
第二節　討幕運動と江戸幕府の滅亡 / 189
第三節　明治維新 / 192
第四節　文明開化と国民生活の近代化 / 198
第五節　明治初期の対外関係 / 201
第六節　民権運動の展開 / 203
第七節　明治憲法の誕生 / 208
第八節　大陸への進出と中日甲午・日露戦争 / 211
第九節　近代産業の発展 / 215
第十節　近代文化の発達 / 220
練　習 / 228

第十一章　大正時代 / 231
第一節　明治末期から大正初期にかけての政治 / 231
第二節　第一次世界大戦と日本 / 235
第三節　軍拡競争とワシントン体制 / 243
第四節　大正デモクラシーの思想と社会運動 / 246
第五節　関東大震災 / 254
第六節　文化の大衆化と市民文化の発達 / 257
練　習 / 261

第十二章　昭和時代(戦前) / 264
第一節　金融恐慌と経済政策 / 264
第二節　田中内閣の強硬外交と対中侵略 / 266
第三節　軍部の台頭と九・一八事変 / 268
第四節　総力戦体制づくりの開始 / 271

第五節　日本の対中戦争　/ 273
第六節　ファシズム支配体制と戦時統制経済 / 275
第七節　アジア太平洋戦争 / 278
第八節　戦前時期の大衆文化 / 281
練　習　/ 286

第十三章　昭和時代（戦後） / 288
第一節　占領統治と民主的諸改革 / 288
第二節　戦後初期の経済と社会 / 295
第三節　冷戦下の講和と安保体制 / 299
第四節　吉田茂の権力主義政治と民衆の政治闘争 / 305
第五節　戦後体制の打破と所得倍増計画 / 308
第六節　経済大国への成長 / 313
第七節　戦後の社会と文化 / 318
練　習　/ 325

第十四章　昭和から平成へ / 328
練　習　/ 335

付録一　日本史略年表 / 338
付録二　日本国名・県名対照図 / 347

主要参考文献 / 348

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第一章　日本の誕生

日本列島の成立と日本人の登場――列島旧石器人の風貌と石の文化――縄文土器――縄文人の生活と社会――弥生文化と社会――日本農耕文化の成立――国の興亡と邪馬台国連合

第一節　日本列島の成立と日本人の登場

旧石器時代は、250 万年前から紀元前 1 万年の間とされている。地質学的にいうと、人類が絶滅した動物と共存していた洪積世に属する。その時期に活躍した人類の種の区分により、前期旧石器時代・中期旧石器時代・後期旧石器時代の 3 期に分けている。前期旧石器時代（約 250 万～15 万年前）は猿人や原人の段階、中期旧石器時代（約 15 万～3 万年前）は旧人の段階、後期旧石器時代（約 3 万年～ 1 万年前）は新人の段階に、それぞれ当てられている。後期旧石器時代には、現在の日本人の直接の祖先である新人が生活しはじめた時代と言われている。考古学的にいうと、打ち欠(うか)かれた石の道具である打製石器(だせいせっき)という単純な石器を使用して狩猟(しゅりょう)・採集(さいしゅう)生活を営んでいた時代でもある。また、旧石器時代は地質年代で見た場合、第三紀鮮新世末から第四紀洪積世[1]に属し、それは 250 万年前から 1 万年前の間に 4 回の氷期

[1]新生代地質年代の区分のうち、最後の約 6500 万年前から現在までをさす。中生代の白亜紀が終わると同時に始まり、第三紀（約 6500 万年～約 164 万年前）と第四紀（約 164 万年前～）に区分される。洪積世地質時代、約 164 万年～約 1 万年前までの一区分で、第四紀の前半にあたる。洪積世、最新世、氷河時代ともよばれる。ホモ・エレクトゥス（原人）が出現し、現代人の段階まで進化した時代であり、考古学上の編年では旧石器時代と縄文時代草創期に相当する。

を数えると言う、大氷河時代[①]でもあった。

洪積世の初期には地殻変動によって日本列島の骨格が出来始め、東アジア大陸との間に日本海が広がったが、東海（東シナ海）北部では陸続きであった。その後氷河期の海面降下のため、二万年前のウルム氷期[②]には現在より約 100 メートルも海面は下がっていた。当時の日本列島は亜寒帯から冷温帯気候に属し、気温は現在より四～七度低かった。更新世はまた、火山活動が活発な時期で、富士山や浅間山が噴火し、関東ローム層を代表とする火山灰層を堆積した。

日本列島の最古の時代を表すのに、先土器時代と言う用語も使ってきたが、それは縄文土器時代に先立つ日本独自の文化段階という意味で使われてきたが、現在では世界史的視野で石器文化を位置付ける旧石器文化（時代）と言う用語が広く使われている。ただし、旧石器時代は人類が誕生した約 600 万年前から 200 万年前の期間も含めることがある。日本列島では現在のところ、確かな旧石器文化は約 4～3 万年前頃の後期段階しか確認されず、列島の旧石器遺跡は、ほぼ全てが酸性土壌の火山灰（ローム）層に包含されていることから、人骨や動物骨の発見があまり期待できない。したがって、日本の旧石器時代研究は石器が中心になっている。

日本の旧石器時代は、約 3 万 5 千年前の後期旧石器時代を始まりとする。いわゆる原人や猿人などのことではなく、今の日本人と同じ新人の時代に入ってきてからである。しかも、ナイフ型石器というかなり完成された石器を伴う。つまり、旧石器人は高度な技術をもって、日本列島に到達した。日本にはナウマン象とマンモスが生息していて、マンモスは比較的新しく日本に

---

①地球の歴史の中で、極域の氷床が大きく発達した時代をさし、約 164 万年前から 1 万年前の洪積世を最後の氷河期という。この時期には地球には何度か氷河時代が訪れ、平均気温は今より 3～5℃も低かった。そのため、ヨーロッパ北部、ロシア、北アメリカは、氷と雪に厚く覆われていた。日本でも、氷期には氷河が形成されたことがあったことが、地形などの証拠からわかっている。現在、氷や氷河に覆われている部分はわずかで、地球の陸地面積の内 10%ほどである。実際に氷河のある場所は北極圏や南極圏、アンデス山脈、ロッキー山脈、ヒマラヤ山脈、アルプスなどの山岳地帯にかぎられる。

②第四紀の氷河時代の最後の氷期。第 4 氷期とも。ほぼ 7 万年～ 1 万年前。この間に 4 亜氷期が認められる。この時期の気温や海面低下量についてはいくつかの見解があるが，気温は 6 ～10℃，海面は 80～140m ほど低かったと推定されている。

到達した。マンモスはヴュルム氷期の初期、約5万年前ごろと推定され、ナウマン象の方は朝鮮半島と陸続きと考えられている 15 万年前ごろのリス期[①]に到達したらしい。ナウマン象は中国の黄土動物群の一つとして捉えられているから、半島経由と推定されている。ナウマン象が日本に到達した時代は、新人は存在せず旧人の時代である。ナウマン象を追って旧人が日本列島へ赴いた可能性は、今のところまったくない。その後、朝鮮半島との陸橋は消滅する。ふたたび陸橋ができ大陸とつながるのは、マンモスが到達するヴュルム氷期の時になる。この時の陸橋は、大陸→樺太→北海道のルートだけで、朝鮮→九州のルートはない。なぜこのようなことが起きるのか不明だが、動物化石の出土から考えるなら、納得のいく説明になる[②]。

ウルム氷河期の東北・信州が現在の北海道東部、関東・近畿・中国・四国・九州が現在の東日本程度の気候である。屋久島・種子島が現在の西日本に該当する。かなり寒い気候で、現在より摂氏5度から10度程度低く、乾燥していた。ウルム氷河期の樹木は比較的まばらで、大型動物の生息に支障はなかったようだ。本土の酸性土壌とはちがい隆起石灰岩の多い沖縄では、古い人骨の保存が良好で、有名な港川人（約17000年前頃）[③]が宮古島で出土している。発見された頭骨は2万6千年前頃のものと推定されている。興味深いことに、沖縄では旧石器時代の石器が発見されておらず、逆に本土では人骨が見つかっていない[④]。したがって、本土と沖縄の旧石器人が、同じ人種かあるいは違うのか判別できない。とりあえず石器が共伴しないので、別とする意見が強い。1929（昭和4）年に発見されて話題となった明石原人[⑤]の

---

①第四紀の氷河時代のミンデル氷期に次ぐ氷期。およそ25万年前から15万年前まで。氷河時代の中では氷床が最も広く広がった時代。海面低下は100m前後。気温は現在より数℃低かった。

②芹沢長介：『日本旧石器時代』一二七～一五一頁、岩波書店1982年。

③港川人というのは、沖縄県具志頭村港川石灰岩採石場で1970年に大山盛保によって発見された化石人骨に付けられた名前で、その年代は放射性炭素法によって、1万8000～1万6000年ほど前と推定されている。港川人の骨は4体分の骨格が残っていて、これらの人骨によって後期更新世時代の日本人の祖先がどのような姿形をしていたかが初めて明らかになった。港川人の骨は、日本人の祖先の骨格として重要なだけでなく、東アジアの新人化石の中で最も保存が良く、アジアにおける新人の進化を解明する上で貴重な資料である。

④稲田孝司：『旧石器人の生活と集団』八二～一一三頁、講談社1988年。

⑤明石市西八木海岸で、昭和6（1931）年直良信夫によって発見された左側腰骨により、かつて日本に住んでいたと主張された原人。更新世前期のものとされたが、標本が戦災で失われたため、確証はない。

腰骨らしいのをはじめとして葛生人[1]・牛川人[2]・三ヶ日人[3]・浜北人[4]などが報告されたが、いずれの場合も考古学上からの遺跡から旧石器を伴って出土したものではないために、いま一つ説得力がない。

以上に述べたように、旧石器時代人骨は現在のところ出土例がきわめて少ない。明石原人・葛生人は現在その古代性は否定されている。確実な資料としては、本州では浜名湖周辺から出土した牛川人・三ヶ日人・浜北人及び大分県聖岳洞穴人などである。沖縄から大山洞人・山下第一洞人・港川人などが出土している。牛川人は旧人段階とされているが、その他いずれも新人に属する。東日本では今までのところ旧石器時代の人骨は、発見されていないが、中部地方以東の東日本では考古学的には石器製作技法が西日本の技法とは異質とされており、また、ウルム氷期の最盛期には、日本列島はシベリアと陸続きであったことを考え合わせると、この時期に沿海州方面からサハリン、北海道を経て後期旧石器時代人東日本に定住したことが考えられる。また、大分県早水台遺跡から出土している石器の年代は確実に 10 万年以上前のものとされており、当然その頃日本列島に人類が生息していたことになる。しかし、縄文人の根幹をなしたものは、量的に見ても後期旧石器時代の渡来集団と考えてよいであろう。

---

[1] 葛生人、栃木県葛生町で 1950 年代に発見され、直良信夫によって更新世人類と考えられた。しかし、発見された骨 8 点のうち 4 点は、動物骨であることが確認された。残りのうちの 2 点は放射性炭素年代測定の結果 400 年前の人骨であることが分かった。

[2] 牛川人、1957 年に愛知県豊橋市牛川鉱山で上腕骨と大腿骨の化石が発見され、鈴木尚によって中期更新世人類（旧人）と考えられたが、人骨の特徴を備えていなかった。

[3] 三ヶ日人、1959 年～1961 年に静岡県三ヶ日町（現浜松市）の石灰岩採石場から頭骨片 5 点、寛骨（腸骨）、大腿骨など複数の成人の骨が発見され、後期更新世人類と考えられたが、放射性炭素年代法により 9000 年前の縄文時代早期の人骨と分かった。

[4] 浜北人は、静岡県浜北市（現・浜松市浜北区）根堅（ねがた）の石灰石採石場で、1960～1962 年に発見された頭骨片と四肢骨片鎖骨・上腕骨・寛骨・脛骨）の人骨化石である。上・下 2 つの地層から出土した。それぞれの層から出た獣骨の年代を加速器質量分析（AMS）法による炭素年代測定での結果は、上層が約 1.4 万年前、下層出土の脛骨が約 1.8 万年前を示した。

第二節　列島旧石器人の風貌と石の文化

縄文時代より以前の時代は、遺跡や遺物が長い間発見されなかったために、日本列島に旧石器人は住んでいなかったと考えられていた。明治44（1911）年N・G・マンロー[①]が、そして昭和6（1931）年には直良信夫[②]が具体的な資料を提示したのだが、いずれも学界からは相手にされなかった。日本に旧石器時代は存在しないという長い間の学界の通説が破られたのは、昭和24年（1949）に、群馬県みどり市笠懸町岩宿の関東ローム層中に包含されている石器を相沢忠洋[③]が発見してからであった（岩宿遺跡）。その後、約30年の間に、北海道から九州までの日本全土から旧石器時代の遺跡が続々と発見され、現在までに3000ヶ所以上に達している。

旧石器人は食料を獲得する方法としては狩猟と採集だけに頼っており、道具としては打ち欠きによって作られた石の刃物を主体としたらしい。また、石の道具以外にも、木や角・骨・牙などの材料が用いられた。1986年（昭和61）の挟み山遺跡の発掘調査では、後期旧石器人の住居の構造を明らかにした。旧石器人は、多く洞穴や岩陰を住み家として利用していたが、そうした中にあって少ないながらも円形もしくは楕円形の浅い竪穴住居や平地住居が見つかり、周囲には柱を立て、内部中央には炉が設けられていたらし

---

①19世紀末に来日したイギリス人N.G.マンローは、早稲田大学教授。横浜市で医師を勤めるかたわら考古遺物の収集を開始した。 のちに彼は大著“Prehistoric Japan”を刊行し、その名を考古学史にとどめている。彼の足跡は南西諸島から北海道にまでおよぶが、採集された石器は約50点あり、打製・磨製石斧や礫器が主体を占める。

②古生物学者、考古学者。はじめ物理学と化学を考古学に応用して縄文土器を分析。1931（昭和6）年兵庫県明石市西八木海岸の更新世の地層から「石器」と人の腰骨片（明石原人）を発見したものの、化石そのものが太平洋戦争中失われてしまうから、化石人骨が旧石器人であると認めてもらえなかった。1932年、早稲田大学の徳永重康の指導を受けて古生物学を研究。化石だけではなく遺跡出土の獣骨、貝殻、植物遺体を鑑定し、動・植物の生態観察を生かして古代人の生活の復原を試みた。著書は『日本旧石器時代の研究』『日本産狼の研究』『野生動物観察記』などの専門書のほか、一般向けや子供向けの啓蒙書、随筆など約70冊に達する。（1902～1985）

③日本の考古学者。納豆などの行商をしながら独学で考古学研究を行っていたが、昭和24（1949）年に群馬県みどり市笠懸町岩宿（旧新田郡笠懸村岩宿）（岩宿遺跡）の関東ローム層から旧石器（槍先形石器）を発見し、それまで否定されてきた日本の旧石器時代の存在を証明した。（1926～1989）

い。屋根はおそらく皮革で張られた天幕のようなものであったと思われる。旧石器人らは小さな集団をつくり、獣や魚場を探し川沿いを中心に移動生活を送っていた。当時、ナウマンゾウやオオツノシカや野牛など大型の動物が沢山いた。これらの動物を捕獲するため時として命を落とす人もいた。そのような格闘の中で人々は石器により工夫を加えていった。

初期の頃は、山火事など自然におきた火を使い、肉を焼き、暖をとり、そして猛獣から身を守っていた。やがて火の起こし方を取得した人間は生活に潤いを得、生活の場を少しずつ広げていったが、この時代いわゆる土器が無く、食生活は焼く、あるいは干す、これらの限られた方法しか無かった。

後期旧石器人は定住していないが、かといって動物を追って放浪していたわけではない。ゴリラやチンパンジーなどの餌を求めて移動することを、動物行動学では「遊動」と呼んでいる。つまり、旧石器人はベースキャンプともいうべき場所から、狩猟あるいはその他の目的のため長距離を移動する。そして再びベースキャンプに戻る行動を行う。これが基本的な行動パターンである。しかし、これだけでは旧石器人が日本に到達するとは言えないが、むしろ、ある瞬間に大きく移動する状況が出現することであろう。この場合は、元の場所に戻ることはない。つまり、遊動→移動→遊動を繰り返すということであり、原因として考えられるのが食糧の確保が困難となった時に移動するのだと思われる。もちろん、移動がそのまま食糧の確保を保証するわけではない。餓死か、移動の果てに食べものにありつけるか、決断と行動を迫ることになったろう。この点で、ある程度の強いリーダーシップをもつ人間の存在を仮定しても問題はないと思う。[①]

芹沢長介によって発掘された岩戸遺跡で、旧石器人の死者を埋葬する土坑墓が見つかっている。死者の生前の装身具や石器・玉などが備えられ、そこにベンガラ（赤色顔料、べにがら）が残っているものがある。シベリアやカムチャツカ半島、東アジアでの死者を埋葬する習俗が遅くとも２万年前に

[①]稲田孝司：『遊動する旧石器人』七八～一〇二頁、岩波書店 1996 年。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com